

二 乗 作 仏 事

正元二年 三九歳

爾前得道の旨たる文。經に云はく「見諸菩薩」等云云。又云はく「始見我身」等。此等の文の如きは菩薩初地初住に叶ふ事有ると見えたるなり。故に「見諸菩薩」の文の下には「而我等不預斯事」と。又「始見」の文の下には「除先修習」等云云。此は爾前に二乗作仏無しと見えたる文なり。

問ふ、顕露定教には二乗作仏を許すや。顕露不定教には之を許すか。秘密には之を許すか。爾前の円には二乗作仏を許すや。別教には之を許すか。答ふ、所詮は重々の問答有りとしも皆之を許さざるなり。所詮は二乗界の作仏を許さずんば菩薩界の作仏も許されざるか。衆生無辺誓願度の願の欠くるが故なり。釈は菩薩の得道と見えたる經文を消する許りなり。所詮華・方・般若の円の菩薩も初住に登らず。又凡夫二乗は勿論なり。「一切衆生を化して皆仏道に入らしむ」の文の下にて此の事は意得べきなり。問ふ、円の菩薩に向かいては二乗作仏を説くか。答ふ、説かざるなり。「未だ曾て、人に向かつて此くの如き事を説かず」の釈に明らかなり。

問ふ、華嚴經の三無差別の文は十界互具の正証なりや。答ふ、次下の經に云はく世「如来智慧の大薬王樹は唯二所を除き生長することを得ず、所謂声聞・縁覚なり」等云云。二乗作仏を許さずと云ふ事分明なり。若し爾らば本文は十界互具と見えたれども実には二乗作仏無ければ十界互具を許さざるか。其の上爾前の經は法華經を以て定むべし。既に除先修習等と云ふと云云。華嚴は菩薩に向かつて二乗作仏無しと云ふ事分明なり。方等般若も又以て此くの如し。総じて爾前の円に意得べき様二有り。一には阿難結集の已前に仏は一音に必ず別円二教の義を含ませ一々の音に必ず四教三教を含ませ給へるなり。故に純円の円は爾前經には無きなり。故に円と云へども今の法華經に対すれば別に撰すと云ふなり。籤の十に「又一々の位に皆普賢行布の二門有り、故に知んぬ、兼ねて円門を用ひて別に撰す」と釈するなり。此の意にて爾前に得道無しと云ふなり。二には阿難結集の時多羅葉に注す、一段は純別、一段は純円に書けるなり。方等般若も此くの如し。此の時は爾前の純円に書ける処は粗法華に似たり。「住の中には多く円融の相を明かす」等と釈するは此の意なり。天台智者大師は此の道理を得給ひし故に他師の華嚴など総じて爾前の經を心得しには、たがひ給へるなり。此の二の法門をば如何として天台大師は心得給ひしぞとさぐれば、法華經の信解品等を以て一々の文字、別円の菩薩及び四教三教なりけりとは心得給ひしなり。又此の智慧を得るの後、彼等の經に向か

つて見る時は、一向に別、一向に円等と見えたる処あり。阿難結集後のしはざなりけりと見給へるなり。天台一宗の学者の中に此の道理を得ざるは、爾前の円と法華の円と始終同義と思ふ故に、一処のみ円教の經を見て一卷二卷等純円の義を存す故に、彼の經等に於て成仏往生の義理を許す人々是多きなり。華嚴・方等・般若・觀經等の本文に於て、阿難円教の卷を書くの日に即身成仏云云、即得往生等とあるを見て、一生乃至順次生に往生成仏を遂げんと思ひたり。阿難結集已前の仏口より出だす所の説教にて意を案ずれば、即身成仏・即得往生の裏に歴劫修行・永不往生の心を含めり。句の三に云はく撰論を引いて云はく「了義經は文に依つて義を判ず」等と云ふ意なり。爾前の經を文の如く判ぜば仏意に乖くべしと云ふ事は是なり。記の三に云はく「法華已前は不了義なる故に」と云へり、此の心を積せるなり。籤の十に云はく「唯此の法華のみ前教の意を説き今經の意を顕はす」と、積の意は是なり。

抑 他師と天台との意の殊なる様は如何と云ふに、他師は一々の經々に向かつて彼の經々の意を得たりと謂へり。天台大師は法華經に仏四十余年の經々を説き給へる意をもって諸經を積する故に、阿難尊者の書きし所の諸經の本文にたがひたる様なれども仏意に相叶ひたるなり。且く觀經の疏の如き經説には見へざれども一字に於て四教を積す。本文は一処は別教、一処は円教、一処は通教に似たり。積の四教に亘るは法華の意を以て仏意を知りたまふ故なり。阿難尊者の結集する經にては一処は純別、一処は純円に書き、別円を一字に含する義をば法華にて書きけり。法華にして爾前の經の意を知らしむるなり。若し爾らば一代聖教は反覆すと雖も法華經無くば一字も諸經の心を知るべからざるなり。又法華經を讀誦する行者も此の意を知らずんば法華經を讀むにては有るべからず。爾前の經は深經なればと云つて淺經の意をば顯はさず、淺經なればと云つて又深義を含まざるにも非ず。法華經の意は一々の文字は皆爾前經の意を顯はし、法華經の意をも顯はす。故に一字を讀めば一切經を讀むなり。一字を讀まざるは一切經を讀まざるなり。若し爾らば法華經無き国には諸經有りと雖も得道は難かるべし。滅後に一切經を讀むべきの様は華嚴經にも必ず法華經を列ねて彼の經の意を顯はし、觀經にも必ず法華經を列ねて其の意を顯はすべし。諸經も又以て此くの如し。而るに月支の末の論師及び震旦の人師此の意を弁へず、一經を講じて各我得たりと謂ひ、又超過諸經の謂ひを成せるは曾て一經の意を得ざるのみに非ず、謗法の罪に墮するか。

問ふ、天竺の論師・震旦の人師の中に天台の如く阿難結集已前の仏口の諸經を此くの如く意得たる論師人師之有るか。答ふ、無著菩薩の撰論には四意趣を以て諸經を積し、竜樹菩薩の大論には四悉檀を以て一代を得たり。此等は粗此の意を積すとは見えたるれど

も天台の如く分明には見えず。天親菩薩てんじん ぼさつの法華論又以て此くの如し。震旦国に於ては天台以前の五百年の間には一向に此の義無し。玄の三に云はく「天竺の大論尚其の類に非ず」云云。籤せんの三に云はく「一家の章疏け しょうしよは理に附し教に憑りよ およ、凡そ立つる所の義他人の其の所弘しよぐに随ひひとえ偏に己が典を讚するに同じからず。若し法華を弘むるに偏に讚せば尚失なり。況んや復余をや」文。何となれば既に開権顕実と言ふ、何ぞ一向に権そしを毀るべきや。華嚴經の「心仏及衆生是三無差別」の文は、華嚴の人師此の文に於て一心覺不覺の三義を立つるは源起信論の名目を借りて此の文を積するなり。南岳大師は妙法の二字を積するに此の文を借りて三法妙ぼうみよの義を存せり。天台智者大師は之を依用す。此に於て天台宗の人は華嚴・法華同等の義を存するか。又澄觀ちようかん「心仏及衆生」の文に於て一心覺不覺の義を存するのみに非ず、性惡しょうあくの義を存して云はく、澄觀の釈に「彼の宗には此を謂って実と為す、此の宗の立義理通せざる無し」等云云。此等の法門許すべきや不や。答へて云はく、弘の一に云はく「若し今家の諸の円の文の意無くんば彼の經の偈の旨理實に消し難し」。同五に云はく「今文を解せずんば如何ぞ心造一切三無差別を消解せん」文。記の七に云はく「忽ち都て未だ性惡の名を聞かず」と云へり。此等の文の如くんば、天台の意を得ずんば彼の經の偈の意知り難きか。又震旦の人師の中には天台の外には性惡の名目あらざりけるか。又法華經に非ずんば一念三千の法門談ずべからざるか。天台已後の華嚴の末師並びに真言宗の人性惡を以て自宗の依經の詮と為すは天竺より伝はりたりけるか、祖師より伝はるか。又天台の名目を偷んで自宗の内証と為すと云へるか。能く能く之を驗すべし。

問ふ、性惡しょうあくの名目は天台一家に限るべし。諸宗には之無し。若し性惡を立てずんば、九界の因果を如何が仏界の上に現ぜん。答ふ、義例ぎれいに云はく「性惡若し断ずれば」等云云。

問ふ、円頓止觀えんどん し かんの証拠と一念三千の証拠に華嚴經の「心仏及衆生是三無差別」の文を引くは彼の經に円頓止觀及び一念三千を説くというか。答へて云はく、天台宗の人の中には爾前の円と法華の円と同の義を存す。

問ふ、六十巻の中に前三教の文を引いて円義を積せるは文を借ると心得、爾前の円の文を引いて法華の円の義を積するをば借らずと存ぜんや。若し爾らば三種の止觀の証文に爾前の諸經を引く中に円頓止觀の証拠に華嚴の「菩薩於生死」等の文を引けるをば、妙樂積して云はく「還って教味を借りて以て妙円を顕はす」と。此の文は諸經の円の文を借ると積するに非ずや。若し爾らば「心仏及衆生」の文を一念三千の証拠に引く事は之を借れるにて有るべし。答ふ、当世の天台宗は華嚴宗の見を出でざる事を云ふか。華

嚴宗の心は法華と華嚴とに於て同勝の二義を存す。同は法華・華嚴しよせんの所詮の法門之同じとす。勝は二義あり。古の華嚴宗は教主と対菩薩衆等の勝の義を談ず。近代の華嚴宗は華嚴と法華とに於て同勝の二義有りと云云。其の勝に於て又二義ありといふ。迹門は華嚴と同勝の二義あり。華嚴の円と法華迹門そつたいみょうの相待妙の円とは同なり。彼の円も判はん此の円も判その故なり。籤せんの二に云はく「故に二妙もつを以て以て三法を妙ならしむ。故に諸味の中に円融有りと雖も全く二妙無きなり」と。私志記ししきに云はく「昔の八の中の円は今の相待の円と同じ」と云へり。是は同なり。記の四に云はく「法界を以て之を論ずれば華嚴に非ざる無し。仏慧を以て之を論ずれば法華に非ざる無し」云云。又云はく「応に知るべし、華嚴じんみらいさいの尽未来際じょうざいりょうぜんは即ち是此の経の常在靈山なり」云云。此等の積は爾前の円と法華の相待妙ぜつたいかいえと同ずる積なり。迹門の絶待開会ぜつたいかいえは永く爾前の円と異なり、籤の十に云はく「此の法華経かいごんけんじつかいしゃくけんぼんは開権顕実開迹顕本す。此の両意は永く余経に異なれり」と云へり。記の四に云はく「若し仏慧を以て法華と為さば即」等云云。此の積は仏慧を明かすは爾前法華に亘り、開会かいえは唯法華に限ると見えたり。是は勝なり。爾前の無得道なる事は分明ふんみょうなり。其の故は二妙を以て一法に妙ならしむるなり。既に爾前の円には絶待の一妙かを欠く、衆生も妙の仏と成るべからざる故に。籤の三に云はく「妙変じてそと為る」等の積是なり。華嚴の円が變じて別と成ると云ふ意なり。本門は相待絶待二妙とも俱に爾前に分無し、又迹門にも之無し。爾前迹門は異なれども二乗けんじは見思むみょうを断じ菩薩は無明を断ずと申すことは一往之を許して再往は之を許さず。本門寿量品の意は爾前迹門に於て一向に三乗とも俱に三惑を断ぜずと意得べきなり。此の道理を弁へざるの間、天台の学者は爾前法華の一往同の積を見て永異の積を忘れ、結句名けっくは天台宗にて其の義分は華嚴宗に墮ちたり。華嚴宗に墮ちるが故に方等般若の円に墮ちぬ。結句は善導ぜんどう等の積の見を出でず。結句後には謗法の法然しししんちゆうに同じて「師子身中の虫の自ら師子を食らふが如し」文仁王經の下に。「大王、我が滅度の後未来世の中に四部の弟子・諸の小国の王・太子・王子すなわ乃ち是三宝を任持にんじし護れば、転更うたに三宝を滅破すること師子の身中の虫の自ら師子を食らふが如し、外道には非ず多く我が仏法を壊りて大罪過を得ん」云云。籤の十に云はく「始め住前じゅうぜんより登住とうじゅうに至る来このかた全く是円の義、第二住より次の第七住もんそうに至る文相次第して又別の義に似たり。七住の中に於て又一多相即自在べんを弁ぎょうこうじず。次の行向地又是次第差別の義なり。又一々の位ふげんぎょうふに皆普賢行布の二門有り。故に知んぬ、兼ねて円門を用ひて別に撰すと。